

ワイズユース（賢明な利用）



漁業

シジミ日本一の産地における徹底した質源管理

～宍道湖～

汽水湖である宍道湖は、シジミの全国漁獲量で常に上位に入る日本有数の産地です。ここで獲れるヤマトシジミは「宍道湖しじみ」としてブランド化されており、全国的に有名です。シジミは餌となる植物プランクトンなどとともに湖水を吸い込んで吐き出すことによって、水をろ過しており、水質浄化に貢献しています。

シジミは深いところには生息できないため、宍道湖での生産適地は湖全体の3分の1しかありません。宍道湖漁業協同組合では、禁漁区の設定、漁獲量の制限、違反者に対する罰則の規定などにより、自主的な資源管理を行っています。



「打瀬舟」による穏やかな漁法

～野付半島・野付湾～

野付湾の浅い湾内にはアマモ群落が広がっており、ホッカイシマエビの生息場所になっています。ここでは、漁船のスクリーンでアマモを傷つけないよう、動力を使わず風の力を利用した漁法を用いています。白い三角形の帆をあげた船「打瀬舟（うたせぶね）」を流しながら、網を引く独特の漁法は、明治時代から続けられており、夏から秋の野付湾の風物詩になっています。また漁協では、漁期や1日の漁獲量、網目の大きさなどを制限して、資源管理を行っています。穏やかな漁法であるため、ひげ1本も折れていない美しいエビが捕獲でき、高値で取引されています。



高品質ブランド商品「カキえもん」と湖の水質保全の取り組み

～厚岸湖・別寒辺牛湿原～

厚岸湾と厚岸湖では、カキやアサリの養殖が盛んです。特にカキについては、近年になって漁協の徹底した管理の下で品質を高めています。地元産の稚貝にこだわって育てたブランド商品「カキえもん」は、高い評価と人気を得ています。

おいしく安全なカキを継続的に生産するためには、湖の水質保全が重要です。そこで、漁協が先頭に立って、合成洗剤を石鹸に変える運動を始め、今では町民のほとんどが協力しています。また、カキの成長は豊かな森から流れてくる栄養塩に支えられているため、町をあげて植林を行う活動も行っています。



観光

湿原の保全に配慮した観光

～尾瀬～

湿原や沼が広がる尾瀬では、多くの人々が登山やハイキングを楽しんでおり、地元の経済を支えています。関係行政機関、地元自治体、尾瀬保護財団、事業者などが連携・協力して、利用者による自然環境への負荷の軽減に配慮して、自然保護と観光利用の両立を目指した取り組みを進めています。ビジターセンターや木道、案内標識、公衆トイレや排水対策の整備、マイカー規制、ゴミ持ち帰り運動、湿原の植生復元事業などさまざまな取り組みが行われています。



農業

生きものあふれる田んぼでつくるブランド米

～蕨栗沼・周辺水田、円山川下流域・周辺水田～

国内有数のマガンの越冬地、宮城県の蕨栗沼の周辺水田では、収穫を終えた冬の水田に浅く水を張っておく「ふゆみずたんぼ（冬期湛水水田）」が行われています（左写真）。「ふゆみずたんぼ」は、飛来したマガンやハクチョウ類に羽を休める場所を提供するばかりでなく、イトミミズがつくる「とろとろ層」による抑草効果や糞による農地の肥沃化など、農家にも恩恵をもたらしています。ふゆみずたんぼで無農薬・無化学肥料で作られた「ふゆみずたんぼ米」は、渡り鳥と人間との共生をアピールする特産品として販売されています。

兵庫県の円山川下流域・周辺水田では、コウノトリの野生復帰のための環境づくりが進められています。その一環として、コウノトリの餌となる生き物が増えるよう、減農薬・無農薬での米づくりが行われており、「コウノトリ育むお米」（右写真）として販売されています。



潟普請や水位管理による管理と利用

～佐潟～

佐潟は、ハクチョウ類の飛来地として、また、オニバスをはじめ希少な水生植物の自生地として知られています。かつては、地域の人々によって、農業用水としての利用や漁業、蓮根の採取などが行われ、夏は、村をあげて湖底の枯れた植物やドロの清掃活動「潟普請」を行い、春はドロを岸辺の潟田にあげて有機肥料として利用するなど、人々の暮らしと密接に関係しながら潟が保全されてきた歴史がありました。

近年は、社会環境の変化や潟の自然遷移が進んでいく中で、かつての活動を参考に、現代版「潟普請」を地元住民が主体となり、NGO、行政の協力を得て実施しています。また、保全の視点から、伝統的な水位管理が地元住民の手で行われているほか、コイ・フナ漁、盆花用のハスの花取りなどの伝統も引き継がれています。



自然に配慮して遊ぶ

～霧多布湿原、慶良間諸島海域など～

渡り鳥の飛来地のクッチャロ湖、谷津干潟、漫湖などでは、バードウォッチングが盛んです。これらの湿地では、観察施設などでフィールドマナーの指導や清掃活動などが行われています。

霧多布湿原では、カヌーや湿原ガイドウォーク、昆布干しなどが体験できるエコツアーが多数行われています。

慶良間諸島海域では、ダイバーや船舶の錨によるサンゴの損傷を防ぐため、ダイビング協会、観光業者、漁協、地元自治体などにより、係留ブイの設置やダイビングの規制区域を設けるなど自主的な取組が行われています。また、サンゴ礁の保全活動の一環として、サンゴを食べるオニヒトデなどの駆除が行われています。



日本最大のカルスト地形、国内最大級の鍾乳洞

～秋吉台地下水系～

秋吉台の地下にある鍾乳洞、秋芳洞には、年間約90万人の観光客が訪れます。鍾乳洞内は年間を通じて気温が一定で、百枚皿、黄金柱、千畳敷などと名づけられた、長い歳月をかけて形成された自然の造形美を楽しむことができます。

観光客の要望にきめ細かく対応し、満足度を高めるための工夫として、「秋吉台観光ディレクター制度」があり、地元詳しいスタッフが、未公開部分の洞窟の探検や秋吉台の草原ウォーキングのガイドを行っています。

